秋田魁新報　2021年12月29日付　社会３

# 高校生対象 県がIT人材育成へ

# デジタル関連の部活支援

## 民間企業 コンテンツ開発を指導

県は本年度から、デジタル関連の部活動を支援する「秋田DXクラブ運営事業」に取り組んでいる。高校生によるデジタルコンテンツ開発を県内の情報系企業が支援。未来の情報技術（IT）人材の育成を図るとともに、県内企業への興味関心も喚起したい考えだ。

事業はパソコン部などの部活がある3高校を対象に10月から実施。それぞれの高校に県内の情報系企業が指導役として付いて月に3回ほど対面やオンラインで指導し、地域課題の解決につながるコンテンツ制作を支援している。

このうち、大館国際情報学院高校（大館市）では、情報処理部が地元大館市の観光アプリを開発。拡張現実（AR）の技術を用いて、秋田犬と一緒に写真撮影ができる機能も搭載する。

今月7日は東光コンピュータ・サービス（大館市）の社員が学校を訪れ、パソコン上で3Dコンピューターグラフィックス（CG）を作るための環境構築を行った。CG映像制作などを手掛けるゼロニウム（秋田市）ともオンラインでつなぎながら、ソフトウエアの操作環境などを整えた。

3年の佐藤由宗さん（17）は「開発を進めていくうちに、いろいろな追加要素のアイデアが出てきた。だが、AR技術を使うとなると高校生のレベルでは難しい。企業の支援を受けて実現できそうなのがうれしい」と話す。

経済産業省は2019年、国内のデジタル人材が30年には45万人足りなくなると推計した。デジタル関連部活はITへの関心が高い生徒の活動の場として、人材育成の土壌になると期待されている。

だが、顧問の教師のみの指導では活動の幅やスキルの向上に限界があるなどの課題もある。そのため経産省は、民間の力も活用しながら、デジタル関連部活の振興を図ろうとしている。

県も、デジタル部活を通じてIT人材の育成や、生徒がITに関心を持つ機会の創出につなげたい考え。16日はオンラインで各高校による中間報告会が行われ、大館国際高の情報処理部と、仁賀保高校（にかほ市）のeスポーツ部、湯沢翔北高校（湯沢市）の商業クラブがそれぞれ制作の進捗状況を報告した。

仁賀保高校は災害が起きた時の避難行動を模擬体験する仮想現実（VR）動画の制作状況を説明。湯沢翔北高校は、中高生の地元企業の魅力を紹介するウェブサイト構築に取り組んでおり、1月からの公開を予定しているとした。

来年3月まで各部活がデータ収集やプログラム作成などを進め、最終発表を行う予定。

県デジタルイノベーション戦略室の小林栄幸室長は「デジタル技術の活用は今後避けては通れない。社会に出る前に情報通信技術を使って何ができるかということを体験してもらい、興味を深めてもらいたい」と話している。

（藤田祥子）

情報系企業の社員とともにデジタルコンテンツの開発に取り組む生徒＝７日、大館国際情報学院高校

©秋田魁新報社